



〈犯罪の陰の悲しみ〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

何だかロマンチックな響きのある題名だが、これはイランの少女更生施設を描いたドキュメンタリー映画である。強盗、殺人、傷害、薬物、売春などの罪で収監されているのは、十代の少女たち。七年越しの撮影許可交渉と準備期間を経て、初めて製作された。

ある冬の日、高い塀に囲まれ、銃を構えた厳重な警備の門をくぐって新入りの少女がやって来た。開いた十本の指全部に黒インクを塗られ、指紋を採られる彼女の緊張の面持ち。だが、窓の外の雪の中庭ではしゃぎながら雪合戦に興じる他の少女らは、まるで女子高生たちのようにくつたくがない。少女らの罪状はそれぞれだが、オスコウイ監督の短い質問に彼女らは自らの犯罪やそれに至る悲惨な過去を驚くほど率直に語る。彼女らの心の叫びに真摯に耳を傾けようとする監督に信頼を寄せているのだらう。

彼女らのほぼ全員が過去に性的虐待を

方)で受け入れられたとか。

母親への思いも複雑だ。家族も刑務所にいるという少女Aは、母に振るった暴力と母の期待に添えない自分への罪の意識に苛まれている。それを聞いてもらい泣きする六五〇と呼ばれる少女も、自分も薬物を買う金をくれない母親を殴つたことを悔やむ。六五〇の名前の由来は「逮捕時に所持していた薬物のグラム数」だという。

兄ばかり愛する母親に一度も抱き締められたことがないという少女Mのノートには離れている恋人との結婚式の絵と、自分が首を吊つた絵とが同居している。思いは揺れるが一つだけ確かなのは「母を愛している」ということ。

釈放が決まった少女は、父親への恐怖が甦り「帰りたい」と訴える。だが、職員は「ここから外のことは私たちには責任はないの。あなたが自殺したとしても」と言い放つ。

親族による暴力や性的虐待によって自身ともに傷ついた少女らには、家庭はもはや安住の場所ではない。少女らは、加害者になる前に被害者だったのだから。「ほとんどの少女が、施設にいた方が幸せて、安心している」とみる同監督は、「施設から出ることを、ある種の拘留の始まりのように表現」したと語っている。



『少女は夜明けに夢をみる』

イラン映画 (76分)

監督：メヘルダード・オスコウイ

公開中